

〔書評〕

## 平野芳信著 『食べる日本近現代文学史』

副田賢 二一

本書は、近代日本文学における「料理小説」とは何か?という命題の下に、《食》の描写の歴史的な系譜を詳細に辿りつつ、そこに見られる物語のかたちと《食》との関係性を総合的に論じた意欲作である。「近現代文学史」とタイトルにあるが、従来の文学史的

文六のグルメ小説や開高健の絶筆、余命宣告後の向田邦子の小説や勝見洋一のエッセイと、その研究対象のバリエーションは多様かつユニークであり、これまで発掘されることのなかった新たな文学史的系譜が生き生きと描き出されている。

的な枠組みにとらわれることなく、《食》という観点から独自の文学的系譜を掘り起こしている。特に、一九八〇年代後半以降の現代小説における「食べる」「料理する」描写を詳細に分析することによって、小説という芸術表現における物語のあり方とその構造の変容を、現代社会における他者との関係性の問題とも関連させて論じている点が本書の特色であろう。ここでは小川糸の「食堂かたつむり」の分析を契機として、「文学的な主題として選び取られる価値(欠損・欠落)のあるもの」が次第に消失し「物語のテンプレート化」が進行しつつある現代日本文学が置かれた状況において「料理が物語を物語として成立させる重要な要素とな」る可能性を提起しており、《料理小説》の歴史的系譜への洞察を踏まえて、鋭い現代文学・文化論を展開している。そこでの「食べる文学史」に登場する作品は、谷崎潤一郎や芥川龍之介、村上春樹等の著名作家の小説から、小川や吉本ばなな、川上弘美や江國香織等の女性作家の小説、獅子

だが、本書の核心は、「《食》をテーマとした文学史」というその枠組みのみにあるのではなく、芸術論、文化論、更には現代の文化消費をめぐる社会論としての側面をも多様に併せ持っているところにあるだろう。実際に、著者が第一章で言及しているところの「物語のテンプレート化」が、小説表現における方法論や素材であるという段階を越えて、もはやそれ自体が文化消費における自己目的となりつつあるような現代日本の状況においては、小説はもはやその「テンプレート」に対する屈折した自意識さえ持たないままに惰性的に反復される行為になり、時には「近代文学」自体をその「テンプレート」のためのデータベースとして献上するような身振りさえ示すようになった。「純文学」小説の表紙がライトノベルに擬態するといった表象レベルの変容のみならず、文学のシミュラクル化とそのデータベース消費によって、「芸術の創造」という行為自体のコンテキストが大きく変容しつつある。

そして、そのような状況は、00年代以降、ポスト・モダンの必然的状况として思想界を中心とした批評言説の中で半ば歓迎されてきた感もある。だが、同時にそのような状況は、「芸術の創造」という側面においては、感性の鈍感さと表現者としての創造性の欠落を隠蔽する装置としても機能してきたと言えるだろう。本書は、「エッセイ」という形態を採りつつも、『食』という強力なアウラの源泉がいかに文学テクストの内部で脈動してきたのかを語り尽くすことによって、そのような状況に対しての明確な異議を表明しているようにも思える。特に、料理を「食べる」側と「作る」側という存在が小説テクスト内で果たしている機能、そしてその関係構造の変遷をめぐる考察は、普遍的な文学論、芸術論のコンテクストとも深く通底するものであり、その視点は本質的な示唆に富んでいる。筆者は村上春樹研究の第一人者であるが、村上テクストの本質とその魅力の核心を、料理を「作る」ことと「書くこと」とのアナロジーにおいて論じたその観点にも、改めて深く首肯させられた。

また、「食べる」表象をメインとしてきた近代日本文学の本質的な男性性への指摘とともに、女性作家における『食』の表象が多く扱われている点も興味深い。その意味で本書は、芸術のアウラが喪失しつつある現代においてあえて提起された、正統的な「芸術家」論として読むこともできるだろう。

また、「血族」「家族」「男女」といった関係性の物語と『食』との本質的な繋がりを指摘している点も注目される。筆者自身の体験をめぐる軽妙な自分語りを交えつつ、作家と料理研究者における才能の遺伝の形態にまで言及するなど、その視点は文学の領域に留まらない自在さを示す。現在のテレビのグルメ番組や雑誌記事の中に

も溢れているように、『食』もまた、自己目的化された「閉じられた」営為として矮小化された上で情性的に消費されがちであり、時には「便所飯」や「コンビニ弁当」などの社会的表象において、社会の中で孤絶した個人と結び付いたイメージとして流布されることも最近が多いが、本書はそのような『食』が、他者との関係性の中で「開かれた」営為として再生し、新たな創造を生み出す文化領域となる可能性を示しているように思われる。

文学研究として十分な批評性を持つ本書であるが、文学テクストを「読む」上での方法論を学ぶ入門書としても非常に有効であろう。「純文学」「大衆文学」「ライトノベル」といったジャンルのボーダーがほぼ無意味化し、芸術的価値をめぐる階層構造もあいまいになった現代日本文化の傾向は、「文学」を特権化してその価値を自明化するような排除的意識を失効させたという部分ではプラス面も見出せるのだが、同時にその傾向は、「では、いったい何を読めばいいのか？」という読者（予備軍）としての学生からの単純な問いに対して返答することを困難にさせたしまった面もある。近代文学の正典（カノン）とされるテクストは現代でもなおその魅力を失うことはないだろうが、それらの過去のテクストをめぐる社会状況や評価、感性の枠組みも大きく変容した状況の中で、学生をいかにそのテクストの言葉に向き合わせるのかという問題は、簡単に答えの出るものではない。そのように「読むこと」をストレートに希求する感性の渇きに対し、本書の示した『食』と（しての）文学、というテーマは非常に魅力的なものになるだろう。メディアの表層に漂流する『食』のかすかなアウラを断片的かつ受動的に消費するような状況にすっかり慣らされてしまった現代のわれわれにとって、『料

理小説》の中で表現されたそのアウラを賞翫するのみならず、文学テクストを「読む」という行為自体のアクチュアリティを回復させる触媒として、《食》をめぐる文学的想像力を再発見できるのかもしれない、と感じさせられた。

（平野芳信『食べる日本近現代文学史』、光文社新書629、

二〇一三年二月刊、七四〇円）

（そえだ・けんじ）